

【歌詞】

へほたる、ほたる、水辺のほたる、なぜ飛ぶ光る宵闇に、葛の葉末の白露が、待つとの便りくれたゆえ。

へその便り誰が運ぶ、森の木陰や梢を巡り、柳のはらろ、うちなびかせつ

へ吹く風に、乗るは便りばかりかは、

へ数うればはや二年前、大君の命かしこみ、野山越え、東の国を立ち出でぬ、道は長手、はろばろと、はろばろと、

へ別れの辛さに、若草の妻の嘆き、まさけて、はや帰りこと、涙ながらに、声の限りに、いつまでもいつまでも、振り向いてちぎれるばかりに袖振れば、己妻しおのづま駆け出だす、その腕に抱かれし吾子よ

幼児。

へ片言に父をとち恋い、花の綿毛を目で追いて、取れよとせがみし小さき手、汝が父はものふ、誇りか
にあれ、汝はわが子、汝が母はわが恋人。

へ初めて逢いしは歌垣かがいの、下弦の月の出を待つころ、互いにそつと呼びかける、唱歌に応えし草枕、
ただ狂おしく短夜の、やがてほのぼの明けるさえ、へ草原に吹く朝風が、妹いものうないに触れるさえ、
妬ましく恨めしく、いつとなく、人言繁くなりぬ。

へ吾妹子わぎもこのもしや、きぬにてあるならば、人目忍びて、人目忍びて、下に着ましを、衣ならば衣にて

ありせば、わぎもこが、下に着ましを、人言の繁かるときは、へ相逢うて、日数重ねて月満ちて、産声あげし吾子よ汝れ、笑えばとて泣けばとて、親はもろとも泣き、笑い、朝な夕なを過ごせしぞや、それも束の間。

へ大君の任のまにまに、旅立ちて、遠つ国の岬守る、われは防人。へ弓束しつかと握り締め、風吹きつける巖の上、荒磯の海に真向かいて立つ、

へおりしも雪降る夕間暮れ、不知火か、それかあらぬか海原、漂う小舟の、三つ四つ五つ、岬めがけて漕ぎ来る、ものふども、ここぞ務めと競い立ち、護り固めて得物おつとり、任かしこみて戦えば、さすがの賊もちりぢりに、あるいは傷負いあるいは海の千尋の底へまっさかさま、船足早めて逃げ出す、

へ闇に紛れし舟影より、宙を切り裂き最後の毒矢、わが胸板を刺し貫く、

へ不知火の、筑紫の国の岬守る、われは防人、われは汝が父、露の宿りの草葉の陰。

へほたる、ほたる、水辺のほたる、なぜ飛ぶ光る宵闇に、

へ己妻よ、いとし子よ、めぐし、うつくし、よくはぐくみし、よく育ちし、汝が未来はきらら、きらら、きらら、きらら、父より多くのことを知り、育てと祈り、つけし名千文、

へ千文よ、あこよ、己妻よ、真さきくあれよ、いつまでも

へほたる、ほたる、水辺のほたる、なぜ飛ぶ光る宵闇に